

正 信 念 仏 偈 3 2

■ 善導讚①

**善導独明仏正意** 善導独り仏の正意をあきらかにせり。

善導大師はただ独り、これまでの誤った説を正して仏の教えの真意を明らかにされた。

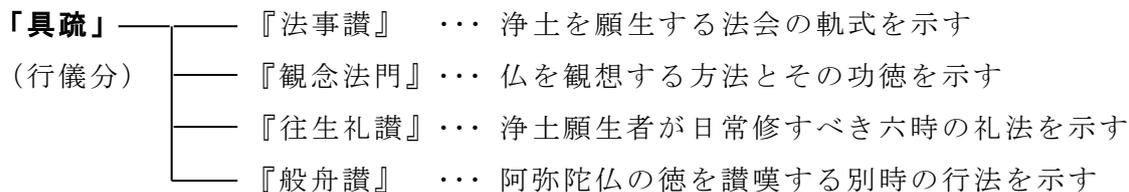
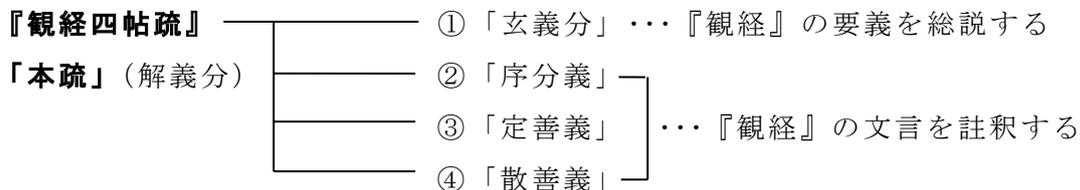
~~~~~



**第5祖・善導大師（613～681）**

隋の末に生まれる。道綽禅師に師事し、浄土教を学ぶ。その後、終南山の悟真寺、長安の光明寺や實際寺などに住み、念仏の実践や民衆教化に努め、69歳のとき、實際寺において往生。称名念仏を中心とする浄土思想を確立する。後世、日本の法然聖人と親鸞聖人に絶大な影響を与えた。

○ 善導大師の著作（五部九卷）



☆ 善導大師の功績

古今楷定<sup>ここんかいじょう</sup> … 『観無量寿経』（以下、『観経』）の解釈で、古今の聖道

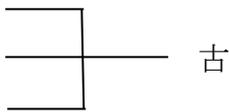
諸師の誤った理解に対して正しい手本を定めた。

※ 「楷」とは手本・基準

### 『観無量寿経』とは？

「浄土三部経」のひとつ。阿闍世という名の太子が、悪友の提婆達多にそそのかされて、父の頻婆娑羅王を幽閉し餓死させようとした「王舎城の悲劇」を導入部として、王の後である韋提希夫人の願いにより釈尊が、阿弥陀仏とその極楽浄土を観想する13の観法を説く。そして、浄土に往生する者を「上品上生」から「下品下生」まで種類に分類し、最後に釈尊が阿難に向かって浄土に生まれるための行法として「無量寿仏の名号を称えよ」と称名念仏を説く。

※随～唐時代にかけて、聖道門諸師によって『観経』が盛んに講じられる。

地論宗 = 浄影寺慧遠 (523-592)   
天台宗 = 天台大師智顛 (538-597)  
三論宗 = 嘉祥大師吉蔵 (549-623)

慧遠等の諸師を継承した人々や撰論学派 —— 今

撰論学派 …… 無著菩薩の『撰大乘論』を中心に学ぶグループ。

### 『観無量寿経』の教説

仏、阿難に告げたまはく、「この経をば〈極楽国土・無量寿仏・観世音菩薩・大勢至菩薩を観ず〉と名づく。また〈業障を浄除し諸仏の前に生ず〉と名づく。（註釈版 117）

『観経』「流通分」（註釈版 117）

仏、阿難に告げたまはく、「なんぢ、よくこの語を持て。この語を持てといふは、すなはちこれ無量寿仏の名を持てとなり」と。

善導大師の『観経』観（「散善義」七祖篇 500）

「仏告阿難汝好持是語」より以下は、まさしく弥陀の名号を付属して、退代に流通せしめたまふことを明かす。上来定散両門の益を説くといへども、仏の本願に望むるに、意、衆生をして一向にもつばら弥陀仏の名を称せしむるにあり。

⇒ 念観廃立（観法を廃して、本願の行である称名念仏を立てる）

## 善導大師の主張

### 古今楷定の具体的内容は「凡夫入報」

- ① 是報非化<sup>ぜほうひけ</sup>…阿弥陀仏の浄土は報土であり、化土ではないこと
- ② 別時意会通<sup>べつじいえつう</sup>…下々品の凡夫も臨終十声の称名で報土に往生すること

聖道諸師による『観経』理解に対し、『観経』は阿弥陀如来の本願力によって罪悪深重の凡夫も、阿弥陀如来の真実の浄土（報土）に往生できることを明らかにしたのが善導大師。

### ○九品の往生

#### 上品三生…

菩提心を発し、因果を深信し、大乘を読誦し、行者を勧進（行福）

#### 中品上生、中品中生…

三帰を受持し、衆戒を具足し、威儀を犯さない（戒福）

#### 中品下生…

仁・義・礼・智・信といった世俗生活の徳目を実践。父母に孝養し、師長に奉事し慈心にして殺さず、十善業を修す（世福）

|      |    |    |
|------|----|----|
| 上品上生 | 遇大 | 行福 |
| 上品中生 |    |    |
| 上品下生 |    |    |
| 中品上生 | 遇小 | 戒福 |
| 中品中生 |    |    |
| 中品下生 |    | 世福 |
| 下品上生 | 遇悪 | 念仏 |
| 下品中生 |    |    |
| 下品下生 |    |    |

※「福」とは自他共にしあわせをもたらす行為のこと。「善」と同義。

### ① 是報非化

#### ・聖道諸師の解釈

凡夫が往生できる浄土は程度の低い世界であるから、阿弥陀仏の浄土は化土であると解釈。

「玄義分」（七祖篇 326）

問ひていはく、弥陀の浄国ははたこれ報なりやこれ化なりや。答へていはく、これ報にして化にあらず。いかんが知ることを得る。『大乘同性経』（意）に説きたまふがごとし。「西方安楽の阿弥陀仏はこれ報仏・報土なり」と。また『無量寿経』（上・意）にのたまはく、「法蔵比丘、

世饒王仏の所にましまして菩薩の道を行じたまひし時、四十八願を發したまへり。一々の願にのたまはく、〈もしわれ仏を得たらんに、十方の衆生、わが名号を称してわが国に生ぜんと願ぜんに、下十念に至るまで、もし生ぜずは、正覺を取らじ〉」と。いますでに成仏したまへり。すなはちこれ酬因の身なり。

⇒ **阿弥陀仏とその浄土は、因願に酬報した真実の報身・報土である。**

## ② 別時意会通

「別時意」とは遠い未来（別時）に得る利益を、即時に得られるかのよ  
うに説くこと。『撰大乘論』に説かれる仏の方便説。撰論学派への反論。

### ・ 聖道諸師の解釈

『観経』に説かれる称名念仏は、単に仏縁を結ばせるだけの往生の縁因  
に過ぎず、下々品の凡夫が称える十声の念仏は唯願無行と主張。

「玄義分」（七祖篇 322）

いまこの『観経』のなかの十声の称仏は、すなはち十願十行ありて具足  
す。いかんが具足する。「南無」といふはすなはちこれ帰命なり、また  
これ発願回向の義なり。「阿弥陀仏」といふはすなはちこれその行なり。  
この義をもつてのゆゑにかならず往生を得。

「南無」・・・帰命、発願回向（願）

「阿弥陀仏」・・・即是其行（行）

⇒ 願行具足の「南無阿弥陀仏」であるから、凡夫であっても必ず真実  
の報土に往生することができる。

## ○二種深信

「散善義」（七祖篇 457）

深信といふはすなはちこれ深く信ずる心なり。また二種あり。一には決  
定して深く、自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに  
没しつねに流転して、出離の縁あることなしと信ず。二には決定して深  
く、かの阿弥陀仏の、四十八願は衆生を摂受したまふこと、疑なく慮り  
なくかの願力に乗じてさだめて往生を得と信ず。

⇒ **機の深信と法の深信**